

ラケットボールの経緯と今後の動向

○石塚千登勢（明治大学）
松浦三代子（東京女子体育大学）

ラケットボール・ニュースポーツ・生涯スポーツ

I. 研究目的

近年における都市化、生活の便利化等による身体的活動の機会の減少、さらに、社会の高度化、高齢化、情報化、国際化等の進展は国民の間にスポーツが健康、体力の維持増進や、心豊かで明るく活力に満ちた生活を営む上で欠くことのできないものであるという認識を高め、スポーツ活動への参加を促進している。

また、スポーツ実践者の増加に伴い、スポーツ活動に対する国民のニーズは多種多様になって来た。自分達の興味、関心や欲求、あるいは能力・適性等に合ったスポーツに親しもうとする志向が強まり、新しいスポーツを考案したり、既存のスポーツのルールを一部改善するなどして、いわゆるニュースポーツが数多く開発され、普及が図られている。

そういった人々の求める健康、仲間とのコミュニケーションを補う形で愛好され始めたのがラケットボールである。アメリカ西海岸で生まれたこのスポーツは、壁打ちテニスからその面を増やししながら現在の形へと発展してきたのである。全面壁ということはボールがどこかへ消えてなくなることを除き、取りに行く手間を省くという意味で大きな利点がある。また、このスポーツは規制が少なく、遊びの要素を含んでいることも愛好される理由の一つと思われる。スピードやパワーに関係なく楽しめるということから体格や性差、年齢に左右されることなく技術を楽しみ、思い切り打ち合うことで発散という効果もある。消費カロリーはテニスの倍の800カロリーであり、運動効果もかなり高い。

こういった特徴を備えたラケットボールの経緯と今後の動向を調査・研究することにより、ラケットボールの将来性の展望を考察する。

II. 研究方法

1. アンケート調査 調査期間1992年7月～9月
ラケットボール 愛好者 100人 回収率（74人 74%）
ラケットボール非愛好者 120人 回収率（106人 88%）
2. 文献・資料調査
 - ① Sports Illustrated RACQUETBALL by Victor I. Spear, M. D.
 - ② 国際ラケットボール連盟資料
 - ③ 日本ラケットボール協会資料

III. 結果・考察

1. 歴史的経緯

- ① ラケットボールの誕生及び外国の現状
1000年前アイルランドに手の平にボールを当てて打ち返すハンドボールゲー

ムがあり、19世紀に入るとアメリカに伝えられた。1850年に今度はイギリスからスカッシュが伝えられ、パドルゲームの概念を通過し、1950年初期パドルゲーム、スカッシュ、テニスとを混ぜ合わせた「パドル・ラケット」が誕生したのである。1969年になるとケンドラーによってラケットボール協会が設立され、そこで初めて「パドルラケット」から「ラケットボール」へと改名されたのである。その年に行なわれた国際ラケットボール選手権大会で初の男子チャンピオンが、その翌年には女性チャンピオンが誕生するに至ったそれ以降、毎年必ず国際大会が行なわれているのである。

他のスポーツに比べ費用もかからず、ルールも簡単で年齢、性別を問わず楽しむことから、今や広く親しまれるスポーツとなった。1970年当初、アメリカに2つのクラブと5万人の競技者を有するだけの者が、10年後には500以上ものクラブが存在し、競技者数も500万人以上の増加を遂げ、今後も更にその数を増す傾向にあることがこのラケットボールの人気を示しているのである。

アメリカの実態をみると、日本ラケットボール協会が把握しているところによれば、国際ラケットボール連盟に加盟している国はすでに50カ国を越え、2年に1度行なわれている国際大会には毎回最低でも30カ国が参加しているというのが現状である。1990年における加盟国の地域分布を見ると北アメリカ（3カ国）、中央アメリカ（11カ国）南アメリカ（9カ国）、ヨーロッパ（14カ国）、アフリカ（5カ国）、オセアニア（2カ国）となっている。中心はまだアメリカであることは明白である。人口及び施設数もピーク時に比べればその数は減少してはいるものの、今なお、増加の傾向にあることは確実である。また、この世界ラケットボール競技人口が最低でも1500万人を超えるであろうと日本ラケットボール協会や国際ラケットボール連盟は予測しているのである。

新しい目標として、オリンピックのデモストレーションの進出が考えられている。1996年のアトランタ・オリンピックでもデモストレーションとしての参加を希望したが惜しくもはずれ、今回は女子ソフトボールにその座を譲り渡したが、次回2000年のオリンピックで再度挑戦する覚悟を決めているようである。

そういった僅かで地道な努力の積み重ねが今日のラケットボールの発展を作り上げたものであることは疑う余地もない。1994年には、メキシコで国際大会が予定されているが、ここでも40カ国以上の参加がすでに決まっていると言う。その中に日本が含まれていることは言うまでもない。

② 日本の歴史及び現状

我が国では、1979年以前には、米軍基地と東京、神戸のYMCAに1コートずつしかなかった。当時ラケットボール愛好者は200人程度であった。しかし、晴海のドウ・スポーツプラザ（後のJARA本部）に1コートが設立されたのに伴い、この愛好者の組織化と正式なラケットボール協会の発足を促すことになったのである。1980年末には僅かなコートと参加者で全日本ラケットボール選手権大会も行なわれ、発展への先駆けとなった。協会は、日本にラケットボールを根づかせるために、バッド・ミューライゼン氏と故ミルトン・ラドミルヴィッチ氏の米国

人の協力を仰ぎ、「親しみ易い健全なスポーツ」への発展を目標にラケットボールの普及に努めてきたのである。今日では、その人口は25万人にまで増加し、大きな可能性と課題を持ったスポーツとして今後の発展を期待されるに至っている。

2. 調査結果

① ラケットボールの好・嫌

任意に選んだ一般の方にアンケートを行なった結果、ラケットボールの知名度の低いことがわかった。知っていると答えたのは37.7%である。年齢別割合をみると70%が20代の若者である。「将来やってみたいと思うか」を尋ねたところ、69.7%が「やってみたい」と答えている。

また、体験者の具体的な感想は「楽しい」「ハードである」「健康によい」という答えが半数以上を占めていた。89.5%が生涯スポーツとして今後も継続していきたいと答えている。性別や年齢を問わず興味の持てるスポーツと言えよう。

② 経験年数と継続性

Mスポーツクラブでラケットボールを主として行なっている者の経験年数は1年未満が最も多く、次いで2年、3年である。中には7年、8年という人から最高は10年と幅の広さが見られた。

ラケットボールとの出会いについてみると、80%がサークルの紹介で知ったと答えている。しかし、10年の経験を誇るのはスポーツクラブ加入者で30～50代に見られた。

③ 施設・情報

施設に対しては、80.9%の者が「不足である」と答えている。資料1が示す通り競技人口の急激な増加に対しコート、クラブ数の増設が追い付いていない現状が伺える。また、「続けて行きたいと思うか」に対しては100%が「続けて行きたい」と答えている。ここでもラケットボールの将来性に明るい展望が見られる。

しかし、ラケットボールの実施者の大半が学生であり、サークル活動としていることから卒業後はごく限られた者しかプレーできず、発展への可能性は狭められていることも事実である。今日あるコート施設の98%が民間のスポーツクラブの保有であり、公共施設として愛媛県（松山市）1コート、兵庫県（竜野市）1コートの設置が見られるのみである。今後は公共施設としてのコート設置が急務と思われる。

ラケットボールの情報源はテレビ、雑誌、口コミである。対象者の多くは大学や職場でスポーツクラブに所属し、偶然ラケットボールに出会ったというものである。また、過去にラケットボールの情報を聴いたり見たりしたことが、始める動機に繋がっている者も見られた。

④ 指導者

一般企業でラケットボールコートを保有しているところが2企業あるが、関古鳥の状況と報告している。理由は指導者がいないためと答えている。また民間のスポーツクラブでもその傾向がみられた。指導者養成が叫ばれる理由でもある。

3. 今後の展望

ラケットボールは、この10年で急激な発展を見せたが、その反面問題も数多く抱えることになった。施設、設備の不足や情報の不足、一般に利用しやすい公共施設の不足などが、明らかにその普及を妨げていることが明白となった。

しかし、いくつかの明るい展望も掴むことができた。調査対象の一般者の38%がラケットボールを知っている。またラケットボールを知らないと答えたうちの35%が体験してみたいと思っていること等から将来的に関心を示す人の増加が予測される。

また、7年以上の経験者は10%、4～6年が13%という結果もでており、このスポーツの技術面における奥の深さが理解できる。体験者の100%に近い者が今後も継続していきたいと答えていることから期待を上回る可能性が見いだせた。ここで10代、20代の若い世代に定着が図れば、ラケットボールの将来性も確かなものとなるであろう。

2000年代に入り一層豊かな社会の到来が期待されるが、それは同時に人々の心をも粗野にしつつある。そんな中で、健康でありたいという願いや活動が活発化し始め、生涯スポーツの果たすべき役割はさらに重要なものとなるであろう。その様な中においてニュースポーツとして登場したラケットボールは、解決しなければならない問題も多く残されてはいるものの、この10年の軌跡を見る限り21世紀へ向けて今後の普及と展開、生涯スポーツとしての役割に大きな期待と可能性を持ったスポーツと思われる。

資料1 競技人口・コート推移
(1992日本ラケットボール協会資料)

人口, 単位 (人)

年度	人 口	コート	クラブ数	加盟団体・コート	大会本数	備考	
1979	200	2	2				
1980	5000	3	3		2		
1981	15000	18	5		3	世界大会出場	
1982	30000	37	12		5		
1983	45000	85	30		6		
1984	80000	143	46		7	世界大会出場	
1985	100000	180	60	12	42	8	ワールドゲームズ出場
1986	120000	203	72	24	103	7	世界大会出場
1987	150000	246	81	39	141	18	
1988	180000	270	85	42	187	17	世界大会出場
1989	210000	295	93	47	205	18	加盟クラブ(41)
1990	230000	298	98	50	220	17	世界大会出場
1991	(250000)	(320)	(105)	(55)	(240)	21	世界大会出場
1992	(300000)	(380)	(130)	(70)	(350)	(25)	(世界大会)